

コロナ禍における登録手話通訳活動 についてのアンケート 結果報告書（抜粋）

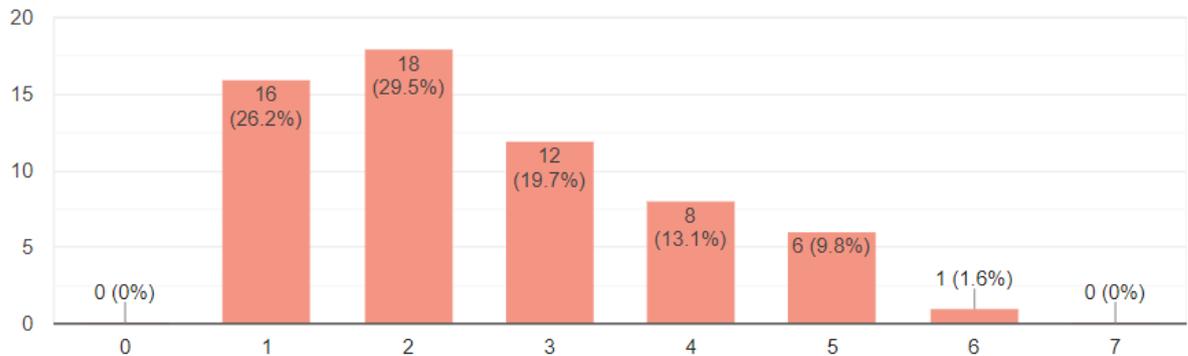


[大阪手話通訳問題研究会 登録班]

2021年9月に会員の皆さまにアンケートへの協力依頼をしまして、61件の回答を送っていただくことができました。大通研登録班として、コロナ禍における登録手話通訳者の皆さまの状況や思いを知る大変貴重な機会となりました。ご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。

このアンケートの結果を大通研会員の皆さまと共有するために報告書を作成しました。ぜひご覧下さい。そして、地域で一緒に活動されている登録手話通訳者の皆さまにも情報共有していただき、より良い手話通訳活動ができるようにするための検討材料にしていだければと思います。

1. 登録手話通訳者として登録されている団体や自治体をお答えください。



複数の団体や自治体に登録されている方が3/4で、のべ登録数は156カ所でした。複数登録が多くなる理由としては、大阪府の登録試験合格者が居住地の市町村でも登録されているということもあると思われます。

最高で6カ所登録されている方がありました。活動の調整や体調管理ができておられるのか気になるところです。登録班として、新たな取り組み課題として考えていきたいです。

2. コロナ禍における手話通訳活動について

(1) コロナ対策について、派遣元から何か指示や説明がありましたか？

指示や説明があったところが104カ所(80.0%)、なかったところが26カ所(20.0%)。3/4の派遣元から指示や説明がありました。

指示や説明の内容は？

- | | |
|-----------------|----|
| 1.消毒・マスク等の感染対策 | 38 |
| 2.活動の可否（専任対応連絡） | 8 |
| 3.現場での対応方法 | 17 |
| 4.検査やワクチンに関する情報 | 3 |
| 5.その他 | 1 |

それについてどう思いましたか？

- | | |
|---------|----|
| 1.妥当・適当 | 27 |
| 2.疑問・不安 | 8 |

指示や説明がなかったことについて、「不安に思った」42.9%、「特に何も思わない」57.1%でした。

どのような説明が欲しいと思いましたか？

感染対策の具体的な説明が欲しかった

派遣元との意思疎通を密にする必要があるのでは、特に「コロナ対策について質問したら派遣がなくなった」との回答もあり、派遣元からの関わりが大事ではないかと思われます。登録手話通訳者集団（登録班を含めて）の役割として、登録手話通訳者同士での情報共有や日常のコミュニケーションの大切さを感じました。

（２）コロナ禍において通訳依頼を受けるための意思確認はありましたか？

意思確認があったところが 62 カ所(63.9%)、なかったところが 53 カ所(46.1%)でした。

あったと回答された 33 人について

通訳者全員に問い合わせがあった	78.8%
依頼案件ごとにきかれた	27.3%

当初、コロナが未知のウイルスで死者も多く出ていたにもかかわらず、登録手話通訳者に対しての意思確認がなされていない派遣元が見られました。登録手話通訳者全員に問い合わせがあった派遣元についても、全ての通訳依頼案件についての意思確認なのか、病院などの場面ごとの確認なのかは気になるところです。

（３）通訳に行って何かあった場合の補償がありますか？

補償があるところが 38 カ所（30.9%）、ないところが 10 カ所（8.1%）、わからないところが 75 カ所（61.0%）でした。

どんな補償かわかる範囲でお書き下さい

ボランティア活動保険	18
損害保険	1
PCR 検査	2
具体的な内容がわからない	1

通訳時の補償について把握していない人が 6 割にも上ることがわかりました。補償については、ほとんどがボランティア活動保険でした。ボランティア活動保険における新型コロナウイルスの取り扱いについて、補償の対象になった旨を文書で通知している派遣元もありました。

(4) 現場では何か感染防止対策がありましたか？

感染防止対策があったところが 99 カ所(85.3%)、なかったところが 17 カ所(14.7%)で、ほとんどの場面でなんらかの感染防止対策がなされていました。

場面ごとに内容をお書きください。(回答数 46 件：複数回答あり)

	医療	講演	会議	その他	合計
消毒液の設置 (手指消毒)	16	1	5	9	31
人との距離をあける、アクリル板などで仕切る	9	6	12	15	42
マスクの使用 (フェイス/マウスシールド、ルカミィ、不織布)	7	5	6	6	24
検温	14	1	3	8	26
換気	1	0	2	3	6
オンラインへの切替	2	1	2	2	7
チェック表の記入			1		1
合計	49	14	33	43	137

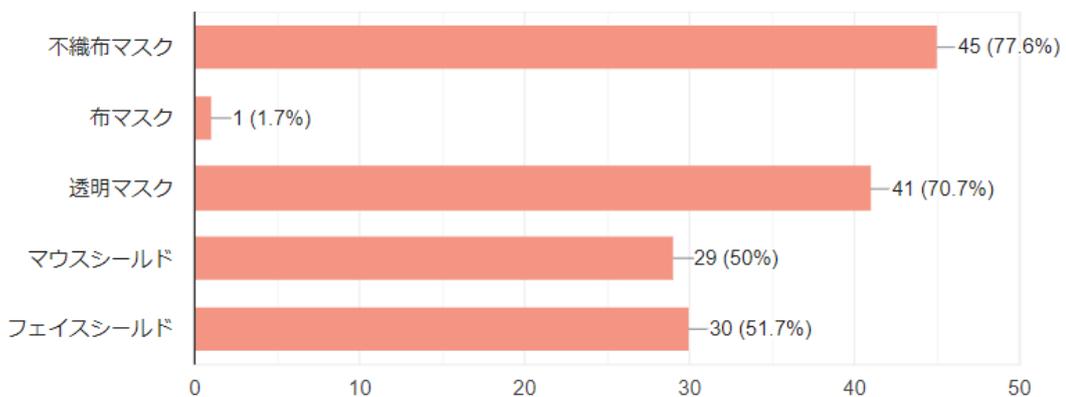
※その他・・・ハローワーク、研修会、企業、面接など

フェイス/マウスシールドから不織布マスクに変更してほしいと言われたり、マスクを外すように指示されたりと、現場によって対応が違っていたとの回答もありました。また、派遣がなくなったとの回答もありました。

医療現場では、手指消毒、検温などの感染対策の回答数が多く、通訳者に限らず来院者全員に行われている対策だと思われます。会議や講演などは、対象者が複数のためか、仕切りや人との距離をあける対策が多かったです。

ほとんどが派遣先の感染防止対策に従うという回答でしたが、感染防止グッズを派遣先が準備してくれているところもあれば、通訳者が持参するという回答もありました。各派遣元より、感染防止対策についての事前確認と的確な指示がされることが望まれます。また、今後は登録手話通訳者側からもどのような対策が望ましいかを考えて、「対応方法マニュアル」のようなものを派遣元と共に作成できると良いのではないのでしょうか。

(5) マスクについて 通訳現場ではどのようなマスクを使用していますか？



マスクについて 指示や相談はありましたか？



“指示あり”・・・誰からの指示ですか？

派遣元（役所・設置等）	19	59.4%
派遣先（現場担当・企業等）	8	22.8%
医師・看護師	3	9.4%
対象ろう者	2	6.2%

マスク等が指定されている現場（医療機関等）がありましたか？

指定があったところが 44 か所（27.7%）、なかったところが 115 か所（72.3%）でした。

マスクについては、不織布マスクと透明マスクの使用が大半ですが、通訳中はフェイスシールドやマウスシールドなどを使用し、待機中と使い分けされている方もありました。

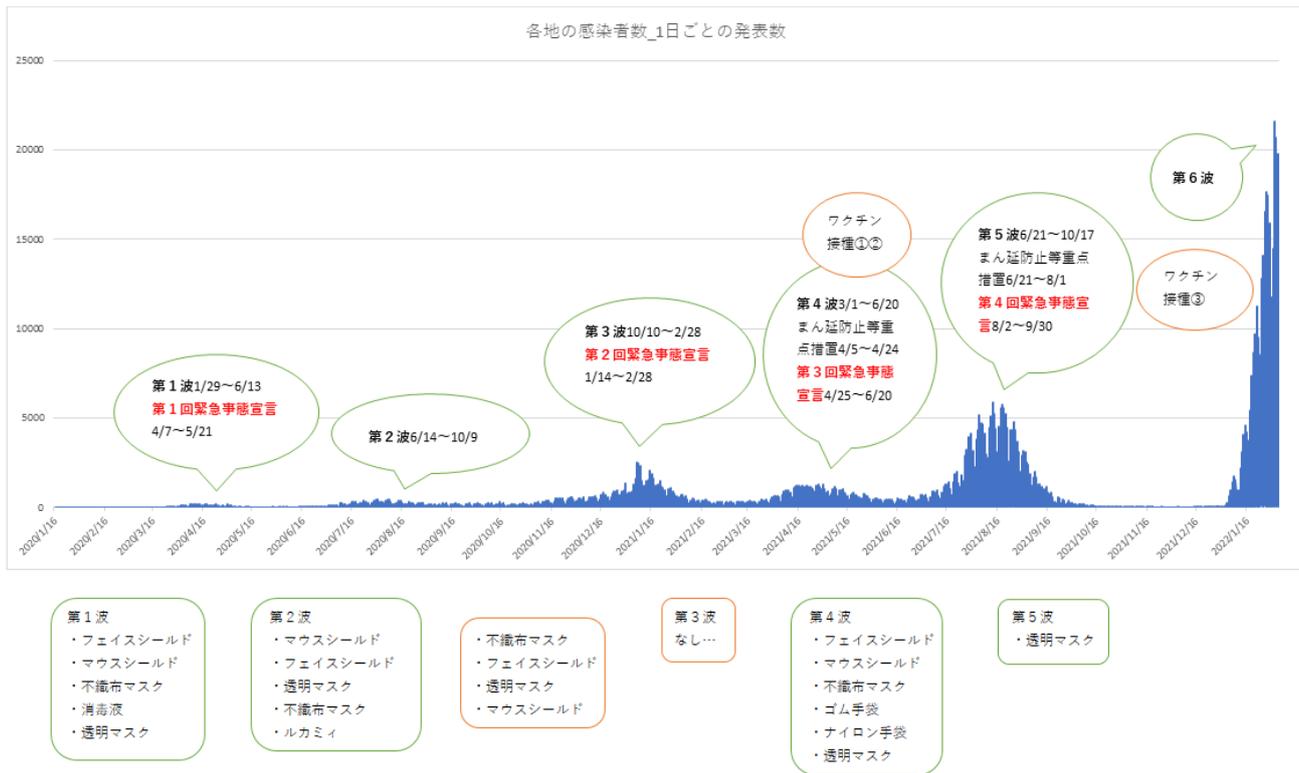
マスクについて、指示があったところもありますが、自身で判断している方や現場で相談している場合もあります。指示については大半が派遣元からですが、現場の医師や看護師、対象ろう者からの指示も少なからずありました。

マスクが指定されている現場はあまり多くない状況です。不織布マスクのみ可能と指示している病院もありますが、様々なマスクがある中、感染防止効果についての科学的根拠がほしいところです。

（6）派遣元からコロナ対策物品の支給がありましたか？

物品の支給があったところが 112 か所（79.4%）、なかったところが 29 か所（20.6%）でした。

“あった”方 いつ頃 何が支給されましたか？



第1回緊急事態宣言時は不織布マスクが入手困難であったため、不織布マスクの配布が多かったようです。第3波の頃には、登録手話通訳者の派遣を再開しているところが多いと思われそうですが、この時期に支給されたものは無かったようです。記載方法が統一されていないので、透明マスクとルカミィ・マウスシールドが同じものなのかどうかは判断できませんでした。

第4回緊急事態宣言時にはゴムやナイロンの手袋を支給したところもあります。感染拡大が続くため、よりしっかりとした感染防止対策を実施する必要性があったためでしょうか。

(7) コロナ禍におけるリモート通訳の経験がありますか？

あったところが 47 カ所 (47.0%)、なかったところが 53 カ所 (53.0%) でした。

リモート通訳で困ったことや工夫したところなどがありましたらご記入ください

リモート通訳の場面

会議、研修、面接、病院、薬局など

ろう者の手話の読み取りについて

- ・画面が小さく手話が読み取りづらい。
- ・以前からネットを繋いでいるところでは、全体を映すので画面の向こうのろう者の手話が読みにくい時がある。

- ・対象者がスマホやタブレットを持って移動する時は、手話が見えにくくなることもある。

音声の聞き取りについて

- ・リモート通訳では必ずと言っていいほど音声の問題が起きる。
- ・音声が聞き取りにくい場面がある。
- ・対象者がスマホやタブレットを持って移動する時は、声が聞こえにくくなる時がある。

通信環境について

- ・対象者のスマホやタブレットを使う時は通信環境が安定せず、コマ送りやフリーズがあり通じにくかった。
- ・通信環境が悪い時がある。

手話表現について

- ・画面からはみださないように手話の表出に気を使った。
- ・画面で見やすいように手を斜めに出すなどの工夫をした。
- ・モニターを見ながら表現したら、視線が下がってしまった。

その他

- ・Zoom は使い慣れているので特にならない。
- ・対象者の顔が見えないので、反応や手話の確認ができない。
- ・リモートでは一部分しか見えないため全体の把握が難しい。
- ・複数人が画面に表示されていても誰の発言が分からず、追いかけるのがたいへん。
- ・ろう者と聴者が混じっての会議は、聞き取りと読み取りの切り替えが集合する場合よりやりにくい。
- ・待機通訳者には画面が見えないことが多く、フォローしにくい。別カメラで通訳者用のモニターがほしい。
- ・ろう者や担当者が慣れてないとやりにくい。
- ・Zoom で対象者と通訳者の画面を固定してほしいが、グループセッションが終わるとまた対象者を探さないといけない。
- ・透明マスクをしていると、不織布マスクに変えるよう言われた。
- ・病院受診の場合は診察室に入ってから通訳になるので、事前に情報を得ることができない。

これから注意したいことなど

- ・内容を事前に確認する。手話表出の範囲、服装など。
- ・リモートと言っても状況が様々なので、現場での打ち合わせ内容が煩雑になる。

たくさんのご記入をいただきました。対象者と対面で直接やり取りできない中、奮闘する手話通訳者の姿が浮かび上がります。手話通訳者の技術面だけでなく、機材の準備や Wi-Fi 環境の整備などのハード面も重要な要素だと思います。

ろう者、会議や研修等の担当者、手話通訳者が共にリモート通訳時の新たなルール作りをし、IT リテラシーをたかめていくことも早急に進めなければならないと思います。

3. コロナ禍における研修等について

感染防止対策等についての研修はありましたか？

あったところが 18 カ所(16.5%)、なかったところが 91 カ所(83.5%)と 5 倍になっています。

遠隔手話通訳についての研修はありましたか？

あったところが 44 カ所(43.6%)、なかったところが 57 カ所(56.4%)と、なかったところがやや多かったです。

派遣元主催の研修はありましたか？

あったところが 88 カ所(73.3%)、なかったところが 32 カ所(26.7%)と、あったところが多かったです。

コロナ禍において、感染防止対策に特化した研修はほとんどされていませんが、派遣元としてはいろいろ工夫して研修を行ってられるようです。

4. コロナ禍における今後の通訳活動について

今までどおり行方が 73.7%、緊急事態宣言中やまん延防止等重点措置発令中は控えたいが 10.5%でした。

今までどおり行方理由

感染対策をきちんとして	7
必要とされているから	10
情報保障として必要	5
使命感を持って	7
その他 私生活も通訳活動も感染リスクは同じだと思う	
感染は怖いが経済的なことを考える	
ろう者に会いたい、手話の技術を保ちたい	

緊急事態宣言中やまん延防止等重点措置発令中は控えたい理由

自分自身を守る	2
仕事柄	1
仕事先や家族に迷惑をかけたくない	3
その他 ワクチン接種が普及してきて、“まん防”なら活動可 ワクチン 2 回接種したことが、安心感に繋がっている	

その他と回答された理由

- ・密になっているような所は避けたい。
- ・自分が感染源になりたくない。
- ・自分の健康は自分で守るしかない。家族や職場に迷惑をかけたくない。
- ・活動中に感染した場合の補償が不明確なまま行政が登録通訳者をリスクのある現場に派遣することに疑問を感じている。
- ・感染状況によって自分の気持ちの変化を考え臨機応変に対処したい。
- ・現場の様子がわからない医療現場は避けたい。
- ・依頼が全くない。ほとんど通訳依頼がない。依頼があれば考える。

コロナ禍においても今までどおり行う理由を見ると、手話通訳者としての責任感を強く感じるが、“登録手話通訳者として”の複雑な思いが見られました。緊急事態宣言中は控えたいという思いは当然のことだと思うが、ここでは登録手話通訳者として、身分保障のないまま活動することに対して疑問を感じる方々の思いを知ることができました。

登録手話通訳者として思うことを自由にご記入ください

様々な視点からの記述がありました。大まかには以下の①～⑥に整理しました。（※個々の記述は省略）

①新型コロナ感染症と活動	16
②通訳現場	10
③派遣元（自治体、事業所）	13
④登録手話通訳者の役割、立場、身分保障	17
⑤通訳保障事業や制度について	9
⑥その他（ろう者、通訳者集団など）	14

①新型コロナ感染症と活動

コロナ禍でどう判断をしていくのか、それが登録手話通訳者個々の判断にゆだねられており、そこには様々な葛藤があることが伝わってきます。

②通訳現場

通訳現場では、通訳を必要とする人への通常の通訳対応よりも気を使う一方で、現場の環境や理解にも注意を払うことが必要になっています。また、リモート通訳が増えてくるだろうことについての記述もありました。

③派遣元（自治体、事業所）

コロナ禍で、派遣元（自治体、事業所）から登録手話通訳者への指示や説明が十分に行われておらず、登録手話通訳者がのぞむことに対する対応がみられない状況があるようです。また、派遣元の専任（設置）手話通訳者との関係についての記述もありました。

④登録手話通訳者の役割・立場・身分保障

これまで、登録手話通訳者の役割、立場、身分保障の不安定さについて言われてきたことですが、コロナ禍によって、それがより明確になってきたこと、そのことを登録手話通訳者自身が感じるきっかけになったようです。

⑤通訳保障事業や制度について

コロナ禍をととして登録手話通訳者派遣事業や制度・通訳保障がどうあるといいのか、どう変わっていくのかなどについて関心も見られました。

⑥その他（ろう者、通訳者集団など）

集団での研修や情報交換の場を求める声がありました。また、当事者団体への要望についての記述もありました。

大通研登録班の活動として初めて取り組んだ会員アンケートですが、集計・分析をしていく中で、多くの気付きが得られました。

これまでも登録手話通訳者の活動状況は地域（派遣元）により違いがあると感じていましたが、コロナ禍においてそれがより明確になったと思います。

身分保障など安心して登録手話通訳者が活動していくための課題や、登録手話通訳者同士や専任（設置）手話通訳者とのコミュニケーションの大切さが改めて見えてきました。今後、どのような像を目指してどのような取り組みができるのか考えていきたいです。

登録班では、これまでも大切にしてきた日常の通訳現場への対応方法や技術の研鑽も継続していきたいです。1人派遣の通訳でも自分1人で解決できることには限りがあります。コロナ禍では“集まる”ということに制約があり、どうしても個々の活動が多くなりますが、みんなで話し合ったり検討したりする機会の大切さも改めて確認することができました。登録班がそのような場になれるようにしていきたいと思います。

2022年4月発行

大阪手話通訳問題研究会 登録班

〒537-0014 大阪市東成区大今里西2丁目17-10-1002（プレジデント今里10階）

TEL/FAX 06-6977-1220 E-mail dtk-office@daituken.net

※本報告書の複写については許可しますが、改編はしないでください。

